

平成30年度「とちぎっ子学習状況調査」の結果概要について

宇都宮市立 瑞穂野中学校

家庭や地域から「信頼される学校」であるためには、学校の状況や生徒の実態を保護者や地域の方々に十分御理解いただく必要があります。その上で、家庭や地域と一体となって生徒を育てることが大切であると考えています。

こうした考えから、平成30年度「とちぎっ子学習状況調査」における本校生徒の学力や学習状況の概要について、以下のとおり公表します。

また、調査結果は、学習指導の工夫・改善に役立てることが大切ですので、調査結果の分析、指導の改善策などを併せて掲載します。

【調査の概要】

1 目的

本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

2 調査期日

平成30年4月17日(火)

3 調査対象

小学校 第4学年、第5学年（国語、算数、理科、質問紙）

中学校 第2学年（国語、社会、数学、理科、英語、質問紙）

4 本校の実施状況

第2学年	国語	91人	社会	91人	数学	91人
	理科	91人	英語	91人		

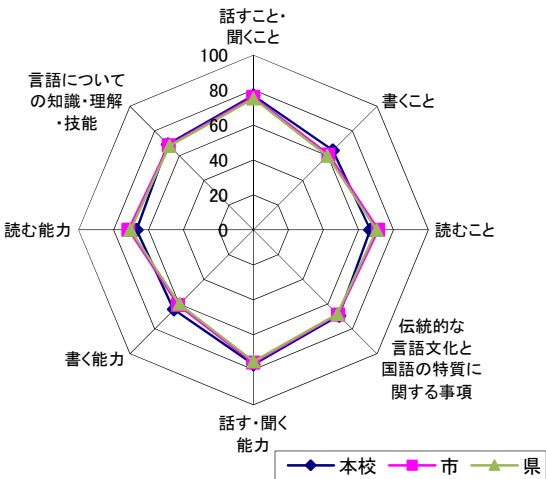
5 留意事項

- (1) 本調査は、対象となる学年、実施教科が限られていることや、必ずしも学習指導要領全体を網羅するものでないことなどから、本調査の結果については、生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であることに留意することが必要となる。
- (2) 本校の傾向等を分かりやすく示すために分類・区分別の平均正答率などを公表した。
- (3) 平均正答率の数値は調査結果のすべてを表すものではないため、「本年度の状況」、「今後の指導の重点」などの分析を併せて記載した。

宇都宮市立瑞穂野中学校 第2学年【国語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	話すこと・聞くこと	76.9	76.0	75.2
	書くこと	64.3	60.9	59.9
	読むこと	66.9	71.4	70.4
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	69.3	68.5	68.0
観点	話す・聞く能力	76.9	76.0	75.2
	書く能力	64.3	60.9	59.9
	読む能力	66.9	71.4	70.4
	言語についての知識・理解・技能	69.3	68.5	68.0



★指導の工夫と改善

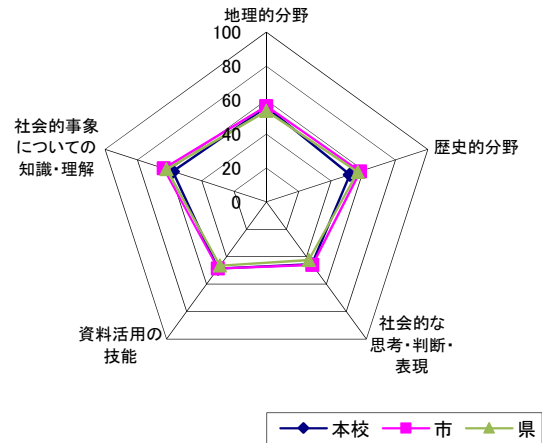
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
話すこと・聞くこと	県の平均正答率より1.7%、市より0.9%上回っているといえる。 ●話を聞いて、自分の意見と比較する設問に課題がある。	授業の中で言語活動を多く取り入れ、自分の意見を話したり、他人の意見を聞いたりする活動を行う。 聞く姿勢についても指導を行い、聞き取りテストを行うことで、聞く力の育成を目指す。
書くこと	県の平均正答率より4.4%、市より3.4%上回っている。 ○分かりやすく伝えるため内容をまとめ、構成を考えて書く設問はよくできている。 ●内容にあった資料を選び、意見を書く問題に課題がある。	文章で書きあわすことに加え、資料を活用する力を高めるために、表やグラフに基づいて自分の意見をまとめる活動も取り入れる。 書くことが苦手な生徒には短い文章から慣れさせ、徐々に長文がしっかりと書けるようになることを目指す。 書く力の基礎となる語彙力を充実させるため、授業中に辞書を引く活動を継続して行っていく。
読むこと	県の平均正答率より3.5%、市より4.5%下回っている。 ●説明文、文学的作品ともに内容を捉える力に課題がある。 ○登場人物の心情を捉える設問はよくできている。	論理的に内容を捉える力を高めるために、段落の役割など、文の構成に注目させる。また、筆者の意見や登場人物の心情などを捉える際に、根拠を挙げて答えられるようにする。 多くの数、種類の文章に触れさせるため、読書の習慣を定着させる。良書を読ませるためにも、選書の仕方についても触れる。
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	県の平均正答率より1.3%、市より0.8%やや上回っているといえる。 ○漢字は書き読みともにできている。 ●歴史的仮名遣いの読みに課題がある。	授業の中で漢字テストを行ったり、新出漢字等を辞書を活用して調べたりする学習を継続して行っていく。 古典分野においては授業の際に、繰り返し音読を行い古文の読み方に慣れ親しむ。また、歴史的背景や関連する出来事なども紹介することで古典に対する苦手意識を解消する。

宇都宮市立瑞穂野中学校 第2学年【社会】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	地理的分野	55.8	56.4	53.5
	歴史的分野	51.7	58.0	56.6
	社会的な思考・判断・表現	45.5	46.1	42.5
	資料活用 of 技能	48.6	48.6	46.5
	社会的事象についての知識・理解	58.0	63.6	61.9



★指導の工夫と改善

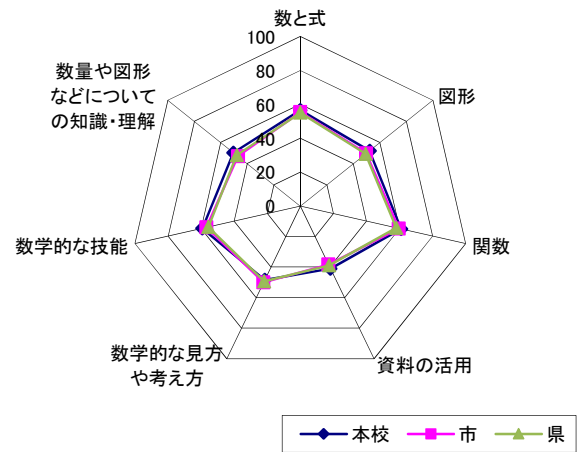
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	平成29年4月18日（火）	今後の指導の重点
地理的分野	●本校は、地理的分野においては、市と比較して0.6ポイント下回り、県と比較して2.3ポイント上回っている。 ●「資料活用 of 技能」については、市と比較してポイントは変わらず、県と比較して2.1ポイント上回っている。 ●大問1「資料から気候帯を推測し、その分布を選択する問題」や大問3「北アメリカ州の正しい断面図を選択する問題」において、市・県と比較して、正答率の低さが顕著である。 ●短答式・選択式の設問にも、市・県と比較して正答率の低い問題が見られる。 ○特に、大問4「南アメリカ州の川の名称を答える問題」においては、市・県と比較しても、正答率が高い。	・地理的分野においては、多様な資料の活用技能に、更に改善の余地が残る結果である。特に地理的分野の場合、学習上での資料の重要性に鑑み、資料読解の際には、分布や変化・推移等に注目をさせ、読み取りの視点を必ず明示した上、考察をさせる指導に当たるよう今後も留意する。 ・授業で諸資料を扱う際は、各資料の特性を押さえる上でも、可能な範囲で、ICT機器（デジタル教科書・拡大投影器等）の効果的な有効活用を継続して行い、指導する。 ・「世界の地域構成」を扱う際は、地球儀・地図等を効果的に使用して、大陸、州、緯度・経度、方位について今後も指導する。 ・「世界各地の人々の生活と環境」を扱う際は、特に気候・宗教等と生活の関連性に注目をさせ、各地の特色を明確化させる指導する。 ・「世界の諸地域」を扱う際は、諸地域ごとの特色を顕著に象徴する諸資料（雨温図・断面図等）を通して、自然（地形・気候）や産業（工業・農業等）といった地域の特色を把握させる学習を徹底する。地域の特色を理解する上で、地域の特性を象徴する資料を効果的に提示することにより、他地域との共通性や相違性を認識させる。
歴史的分野	●本校は、歴史的分野においては、市と比較して0.6ポイント下回り、県と比較して3.0ポイント上回っているが、特に歴史的分野において正答率の低い問題がある。 ●「社会的な思考・判断・表現」については、市と比較して5.6ポイントも下回り、県と比較しても3.9ポイント下回っており、特に歴史的分野において顕著である。 ●大問8の「室町時代におこった戦乱の名称を答える問題」や同じく大問8の「日明貿易における証明書の名称を答える問題」において、市・県と比較して、正答率の低さが顕著である。 ●記述式の設問に加え、短答式の設問にも、市・県と比較して正答率の低い問題が見られる。 ○特に、大問6「資料から弥生時代の社会の変化を考察する問題」においては、市・県と比較しても、正答率が高い。	・歴史的分野においては、様々な社会的事象の知識としての定着が、不十分な状況という結果である。内容教科としての性格上、指導事項が多岐に亘ることは自明だが、特に歴史的分野の場合、社会的事象を十分精選して、定着させる指導を充実する。 ・学習内容の更なる定着のため、学習課題の明示や小單元ごとの振り返り活動の重視、併せて定期テストの事後の有効活用等の方策を促進する。 ・社会的事象の表層的な理解に留まらず、諸社会的事象の相関、因果関係にも留意させ、理解を深化させる。更に社会的思考・判断・表現を育む方策として、今後と言語活動（話し合い活動・討論等）の実践を重視し、一層展開する。言語での表現の他に、文章で表現する取組も継続する。 ・「歴史のとらえ方」の学習の際、年表を活用し、時代を代表する人物を通して、時代区分を理解させるなど、工夫して学習に当たる。 ・古代から中世までの「縄文時代」から「室町時代」の学習の際、時代ごとの特色を他の時代と比較を通して考察させる。その際、政治・文化・外交等の各時代を象徴する社会的事象に注目をさせ、学習に当たる。

宇都宮市立瑞穂野中学校 第2学年【数学】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	数と式	56.5	55.4	55.0
	図形	52.3	49.8	49.2
	関数	60.9	59.6	58.0
	資料の活用	41.0	38.3	38.9
観点	数学的な見方や考え方	48.4	50.0	49.3
	数学的な技能	59.3	56.7	55.7
	数量や図形などについての知識・理解	50.5	47.0	47.9



★指導の工夫と改善

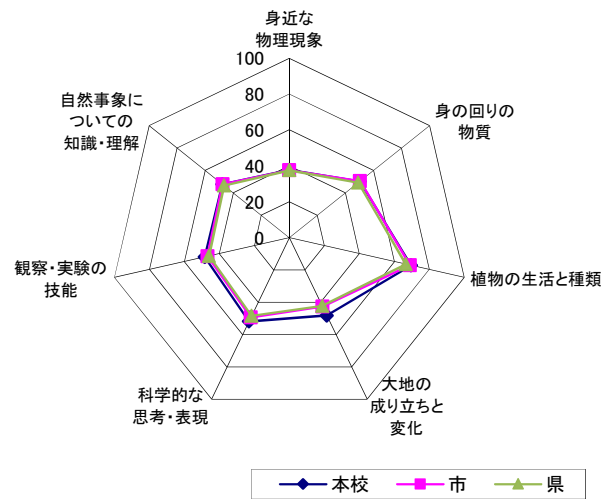
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
数と式	○全体として県平均より1.5%、市平均より1.1%上回っている。 ●基礎問題の自然数を選ぶ問題では県平均を1.4%、四則混合の計算では市平均を1.3%下回っている。	・基本の計算や重要語句の意味の理解につまずきが見られる生徒が多いため、小テストを実施するとともに、重要な内容に関しては繰り返し授業で取り上げるなどして、生徒の理解が深まるような指導をしていく。
図形	○全体として県平均より3.1%、市平均より2.5%上回っている。 ●活用問題の作図が県平均より県平均より1.4%、市平均より3.6%下回っている。	・図形の性質についての理解が不十分な生徒が多く見られる。2学年の論証の授業の前に、もう一度それぞれの図形の性質などをフラッシュカードなどを用いて確認する。また、自ら図形の性質などに気づくことができるような授業展開を考える。
関数	○全体として県平均より2.9%、市平均より1.3%上回っている。 ●活用問題の記述式が県平均より1.7%、市平均より3.8%下回っている。	・グラフや文章などから関数の関係性を見出し、式を求めたり課題を解決したりすることを苦手とする生徒が多いため、授業内で日常生活に関連した問題を取り上げ、生徒の興味や関心を引きつけるとともに、自ら関数の関係性を見出すことができるように授業展開を工夫する。
資料の活用	○全体として県平均より2.1%、市平均より2.7%上回っている。 ●基礎問題の度数分布表から中央値が含まれる階級を答える問題の正答率が県平均より4.5%、市平均より3.2%下回っている。	・重要語句の意味を理解できていない生徒が多いため、小テストなど学習内容の復習を授業で取り上げるなどして、生徒の理解が深まるような指導をしていく。

宇都宮市立瑞穂野中学校 第2学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	身近な物理現象	37.7	37.6	37.5
	身の回りの物質	50.3	50.5	49.1
	植物の生活と種類	69.6	69.0	66.6
	大地の成り立ちと変化	48.2	42.7	42.2
観点	科学的な思考・表現	51.9	49.4	48.5
	観察・実験の技能	48.4	46.8	45.9
	自然事象についての知識・理解	47.7	47.6	46.5



★指導の工夫と改善

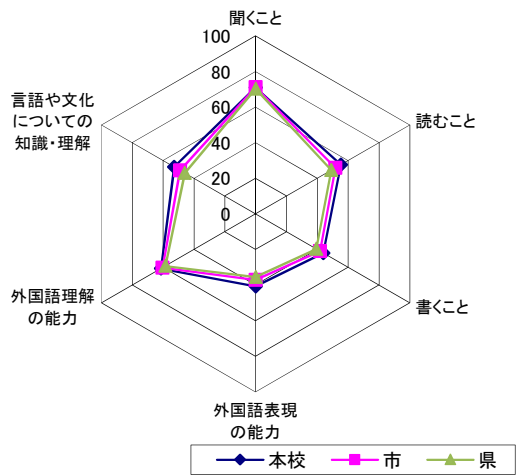
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
身近な物理現象	○本年度は全体として県、市の平均とほぼ同程度である。 ○光については市、県より上回っている。 ○メスシリンダーの使い方などの、実験操作の基礎は身につけている。 ●実験から、気体を特定することができていない。 ●力の表し方が理解できていない生徒が多い。	実験結果から、気体を予想するような、思考力、判断力、表現力を身に付けさせたい。 理科の力の定義は、日常生活の概念と異なる点がある。基礎的な内容から、丁寧に指導する必要がある。また、力の表し方については、力の3要素の定着が図れるよう、練習問題に取り組ませたい。
身の回りの物質	○本年度は全体として県、市の平均とほぼ同程度である。 ○状態変化や粒子の運動についてはよく理解できている。 ●ガスバーナーの適切な操作方法を理解していない生徒がいる。	ガスバーナーの構造から使い方の手順などを理解させる。また、パフォーマンステストにより全員が適切に操作できることを目指す。 科学的な思考・表現については生徒の中に苦手意識が強いようなので、話し合い活動を入れて思考力、表現力を身に付けさせたい。
植物の生活と種類	○県より3.0ポイント上回っている。 ○シダ植物など胞子で増える植物について理解ができている。 ●植物の根、茎、葉の特徴についての理解ができていない生徒が多い。	植物の生活と種類の分野は比較的関心が高く、意欲的に学習に取り組んでいる。今後は3年生の生物単元と関連づけさせながら、わかっていることを図や文章で伝えるコミュニケーション能力を向上させたい。
大地の成り立ちと変化	○県より6.0ポイント、市より5.5ポイント上回っている。 ○火成岩の特徴や地層の成り立ちなどについては理解できている。	比較的、関心の高い内容で意欲的に学習できていると思われるが、地層ができた時代を類推したり、地層が堆積した当時の環境を類推するなどの話し合い活動、グループ活動を多く取り入れていきたい。 この分野でも、分かっていること予想したことを図や文章で伝えるコミュニケーション能力を向上させたい。

宇都宮市立瑞穂野中学校 第2学年【英語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	聞くこと	70.9	71.1	70.2
	読むこと	55.3	51.8	49.1
	書くこと	43.9	41.8	39.4
観点	外国語表現の能力	40.7	37.1	35.5
	外国語理解の能力	61.4	60.4	58.5
	言語や文化についての知識・理解	52.9	49.0	46.0



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
聞くこと	県と市の平均との差は1%以下で、ほぼ同じ正答率である。 ○疑問文を聞き取って適切に応答する問題の正答率は市や県の平均を上回っている。 ●英文を聞き取って、場所や数を答える問題の正答率が低い。	・授業の中でより多くの英文をインプットする活動を続ける。 ・一方的な聞き取りでなく、聞き取りのポイントになるようなインタラクションを大切にし、より細かな情報や深い内容が正確に聞き取れるような工夫をする。
読むこと	○県の平均正答率より6.2%、市より3.5%上回っている。 ●対話文を読んで答える問題で平均正答率が県より2.8%、市より4.8%低い問題があった。	・正答率の低かった問題から、対話文を正確に内容を読み取る力が不足していることが分かった。教科書の読み取りや、授業の中でのやりとりで、正確な内容の理解を求めるような発問を意識して行い、考えを深めさせる工夫をする。
書くこと	○県の平均正答率より2.1%、市より4.5%上回っている。 ●3文以上まとまりのある英文を書く問題では生徒間での差が大きい。	・英文を書く活動で、生徒間の差をなくすために、スモールステップを細かく設定し、書くことに取りかかりやすくする工夫をする。 ・T-Tや習熟度別の授業を活用し、生徒間の差を小さくする工夫をする。

宇都宮市立瑞穂野中学校 第2学年 生徒質問紙調査

★傾向と今後の指導上の工夫

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

○「家の人と学校でのできごとについて話をしている」「家の人はあなたがほめてもらいたいことをほめてくれる」で肯定割合が県より5ポイント以上高い。これは保護者との関係が良好であることを示している。また「自分にはよいところがある」「自分のよさを人のために活かしたいと思う。」「授業で自分の考えを発表する機会が与えられる。」などが3ポイント以上高い。これはD層の割合が100%であることから、教師側が下位の生徒に毎日の授業で発言することや内容の確認がなされていることを表している。

●課題が見られる点は、「学習に対して自分から取り組んでいる」が11.3ポイント、「難しい問題にでようとやる気がでる」が6.4ポイント市と比較して下回っており、A－D層の差が大きい。特に後者の質問のD層は0%である。

また、学習に関する項目のほとんどが、県や市の肯定割合を下回っており、A－D層の差も大きい。特に社会、英語についてこの傾向が強いようである。

学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で、重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
・自主学習ノートの運用－毎日1ページを目安とした自主学習ノートの活用（家庭学習の充実と継続をめざして） ・「ねらい」を授業の最初に掲示することと、授業の流れを板書に残し、振り返りをさせる。	・学芸委員による生徒目線での働きかけ－ 自主学習ノートの提出状況を記録し、「自主学習優秀賞」の表彰を行う。 ・みずほの学習ガイドを用いた、自主学習のやり方の指導を行う。 ・学習内容の振り返り、自分のつまづきを克服させる指導の充実を図り、学習意識を高めさせ、望ましい学習意欲の喚起を促す。 ・相互授業参観では、「ねらい」の提示から「振り返り」までが生徒に分かりやすく板書できているかの視点で授業研究を行う。	・昨年度県平均を大きく下回っていた「家で、テストで間違えた問題について勉強している」「家で、学校や塾で決められた宿題の他に自分で考えた勉強をしている」が県平均とほぼ同じ肯定割合になった。 ・「授業で扱うノートには、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめが書いてある」は今年度も県平均を10ポイント程度下回ったが、昨年度20ポイント近く下回っていただけに、大きく改善されていると言える。

★学校全体で、今後新たに重点を置いて取り組むこと

調査結果等に見られた課題	重点的な取組	取組の具体的な内容
教科の学習についての質問で「好き」「将来のために大切」「授業の内容はよくわかる」などの肯定割合が低い。	・本校の学力の現状と学校の取組を広く知らせ、理解を求めるとともに、家庭の協力を具体的に求める。 A－D層の差を縮めるための具体的な取組を行う。	・学校だより、学年だより、進路だより、学校ホームページ等で家庭の協力を具体的に求め、学校・家庭・地域が一つになって、子どもたちを共に育てていけるようにする。 ・習熟度学習や少人数の指導を工夫し一人一人の理解を深め、学習に意欲的に取り組み、自信をもてるようにする。